# 雨

雨の匂いが残る街角で、僕は見覚えのある女の横顔を見た。信号機のある交差点の向こう側、彼女はベージュのレインコートに身を包み、青い傘を折り畳んで持っていた。少し横を向きながら長い黒髪を片手でほぐす癖、変わらない仕草がそこにあった。すでに十年という時が経過しているのに、僕の心の中で懐かしい季節が揺れた。

やがて信号機が青に変わり人混みの中彼女とすれ違った。僕は何も言わなかった。今さら何を話せば良い、声をかければそれで何かが変わるわけでもないだろう。おそらく彼女も僕のことなど忘れているに違いない。僕は振り向きもせず信号を渡りきると駅へと向かった。

駅に着く頃には、雨はすっかり止んでいた。

ホームで電車を待っていると、胸のポケットでスマホが震えた。知らない番号だった。僕は迷った末に通話ボタンを押した。

「もしもし」

返事がなかった。通話を切ろうとすると

「……何故、振り向かなかったの？　私、ずっとあなたの後ろ姿を見ていたのに……」

声を聞いた瞬間、僕の中で時間が崩れた。懐かしい声であった。

十年前の雨の日、彼女は安アパートの部屋の隅で泣いていた。長い同棲生活にピリオドを打つべく、僕が彼女に別れを告げたからだ。

「すぐにあなただと気づいたわ。あなたも気づいたでしょう」

電話の向こうで彼女が言った。僕は応えなかった。いや応えられなかった。

暫く沈黙が続いた。

「あんまり懐かしくて……」

彼女はそう言うと通話を切った。彼女の声は、雨上がりの風のように静かだった。

やがて電車がホームに入ってきた。電車の窓は雨に濡れていた。僕は電車には乗らずホームで立ち尽くしていた。

降り止まぬ雨のように彼女を愛せば良かった。

僕は心の中で叫んだ。雨は今もなお僕の心の中で降り続いている。